

プレゼンテーション授業を基盤としたPBLとその効果

石井 三恵, 石田 裕子, 河野 彩

(2010年11月12日受理)

The Effect of Problem-Based Learning in Presentation Class

Mie ISHII, Yuko ISHIDA, Aya KONO

Abstract

It has long been said that students enrolled in higher education organizations require three abilities in order to succeed: problem identification ability; problem solving ability; and the ability to clearly express an opinion. The university has been devising interactive ways of learning as an alternative to the more established one-sided teaching and learning style. In recent years, it has been said that classes based on Problem-Based Learning (PBL) should be adopted by higher education organizations as a means for providing those abilities. At Hiroshima Jogakuin University, a presentation course using PBL has shown signs of success since its implementation in 2004. To provide students with adequate time for self-directed learning, we set up a curriculum as follows in compliance with the credit system of higher education organizations in Japan. Students can earn one unit of credit through taking 15 classes in one semester, with each class comprising 45 minutes' lecture time and two hours' self-study time. As with many other courses, the presentation course offers two units in one semester, so students need four hours' self-study time per class to complete the course. Through the examination of the questionnaire completed by students who took the course, as well as other methods of analysis, we were able to evaluate the role and function of self-directed learning in the presentation course. The results showed that at the beginning only 30% of the students actually undertook self-study. We realized that students need to be given an environment that provides more engaging and interactive opportunities for self-directed learning, such as one that incorporates multimedia facilities and materials, and furthermore they should be given feedback on their learning process from an instructor. In response to our findings, we have made several improvements to the course, and as a result have achieved a reasonable level of success in the implementation of PBL.

Key words: PBL, フィードバック feedback, 効果 effective, 自主学習 self-directed learning
高等教育機関 higher education organization, 単位認定 credit recognition

I はじめに

広島女学院大学生生活科学部生活デザイン・情報学科では、1年生後期から3年生前期の2年間という時間をかけ、学生のプレゼンテーション能力を高めるためのカリキュラムを構成し、実施している。学生は、「プレゼンテーション概論」「プレゼンテーション演習Ⅰ」「プレゼンテーション演習Ⅱ」「情報総合プレゼンテーション演習」という科目を履修しながら、プレゼンテーション能力を高めるために、日々努力を積み重ねている。

本学でプレゼンテーションの授業を履修している学生は、自主学習として発表時の自分を反省し、次の発表に備えて発表内容を考察し、少なくとも何回かは練習したうえで、授業に臨んでいる。また、科目によっては、映像作成、プロジェクトチームでのプレゼンテーションなど、グループ活動を必要とし、授業時間外に学生同士が集まって課題に取り組む。このように、自主学習が必要となる授業では、与えられた課題の中で自ら問題を発見し解決していくことが重要であり、問題に基づく学習であるProblem-Based Learning (PBL、以下PBLと記す)¹⁾の要素も含まれる。

しかしながら、プレゼンテーションの授業を進めるにあたって、「不可能である」「難しい」などという理由から「自主学習や練習は必要ない」「学生の発表に対するリハーサルは不要である」という意見も存在する。それは、学生に自主学習をする機会を与えないことを意味し、学生は達成感や成長を実感させる好機を失うことになる。自主学習は、プレゼンテーション能力を高めるだけでなく、学生の成長と自信へつながる大切な時間である。本学で実践してきたプレゼンテーションの授業の場合、自主学習をせずにプレゼンテーション能力を高めることは不可能であると確信している。

また、自主学習をおこなわないということは、授業に関する予習復習を課さないことになる。これは、大学における単位認定の基準に反するものであり、学生の学習効果をいかに高めるかという教員の努力を怠るものである。プレゼンテーションの授業だけでなく、全ての授業において、自主学習の時間の確保は学習効果を上げるためには必要不可欠であり、さらには単位を認定する上での重要な要素であることを再度認識すべきである。

さらに、グループ活動をさせることは、プレゼンテーション授業における重要な要素であると考えている。グループ活動によって、お互いの葛藤をどのように解決すべきかを考える機会を与えることで、現代の大学生に不足しているコミュニケーション能力の充実を図る機会をも与えることができるからである。

PBLはプレゼンテーションに関する授業だけではなく、今後の授業において、学生の学習能力と学習意欲を高めることに効果を発揮するものと期待できる。とくにプレゼンテーションの

授業において必要とされるのは、グループ活動をスムーズに進めるための教室の雰囲気作りと、学生自身がお互いにプレゼンテーションへの熱意を持ち、うまくなりたいという仲間同士の協力、協働ができる環境を作ることが重要であるからだ。

今回、本学で実施しているプレゼンテーションの授業を基に、学生にとっての自主学習の重要性を考えるために、これまでにプレゼンテーション授業を履修した学生へアンケート調査をおこなった。このアンケートを基に、学生が感じる自主学習の重要性、学生の授業に対する満足度などから、プレゼンテーション授業における自主学習と学習効果について考察する。また、PBLを取り入れた今後の授業展開とその効果について考察したい。

Ⅱ 大学における単位認定とその現状

1 単位認定の定義

大学生が講義を受講し、単位を取得するためには、定められた時間、大学の授業に出席し、なおかつ予習復習という自主学習を行わなければならない。文部科学省の「21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―」によると、1単位は「教員が教室等で行う時間」と「学生が事前・事後に教室外において準備学習・復習を行う時間」の合計で45時間必要であるとされている²⁾。これに則り、本学の単位認定に関する規定では、「各授業科目につき授業総時数の 2/3 以上出席し、かつ、その成績が合格の場合に単位が認定される。単位の計算基準は次のとおりである。(1) 講義(授業1時間+自習2時間)×15回=1単位(2) 演習(授業1時間又は、2時間+自習1時間)×15回=1単位(3) 実習、実験、実技(授業2時間+自習1時間)×15回=1単位」と定められている³⁾。講義科目1科目は2単位であり、1コマは45分×2の90分授業であるため、ここでの「授業1時間」とは45分のことである。

このように授業に出席すればよいだけでなく、この予習復習という自主学習を行うことで、はじめて単位が認められるという仕組みは存在している。仕組みがあるにもかかわらず、実際に効果を発揮できていないのではないかとと思われる。文部科学省によると、「教員の問題点として、授業が一方通行である」「授業時間外の自主学習に対する指導が行われていない」「成績評価は試験のみ」など安易な単位認定が行われており、教員の指導不足が指摘されている⁴⁾。また、学生にも授業や自主学習に対する主体的な姿勢が求められているのが現状である⁵⁾。本来、自主学習をしなければ単位を取得することは難しいはずであるが、教員、学生ともに、単

位認定に対して正しく認識できているとは言い難い。

2 大学生における自主学習の実態

実際、大学生は授業に対して、どのように取り組んでいるのだろうか。Benesse教育研究開発センターの『大学生の学習・生活実態調査』⁶⁾によると、学生自身は「自分は勉強している」と考えているものの、自主学習の時間数は不足していることは明らかである。

まず、自分の大学の「授業に対する取り組みについて」であるが、単位認定に必要である予習復習に関する「授業の予習をする」「授業の復習をする」に対する回答では、「とてもあてはまる」と答えた学生はそれぞれ4.3%，5.4%であり、「まああてはまる」と答えた学生は28.2%，29.2%となっており、約3割の学生しか授業の予習復習を行っていないことになる（図1参照）。

しかし、「授業で出された課題はきちんとやる」に対する学生の回答は、「とてもあてはまる」38.7%，「まああてはまる」48.7%と、87.4%の学生は授業で出された課題に対して、きちんと行っている。また、「授業とは関係なく、興味を持ったことについて自主的に勉強する」「授業で興味をもったことについて自主的に勉強する」「授業でわからなかったことは、自分で調べる」に対する学生の回答は、どれも6割を超えている。

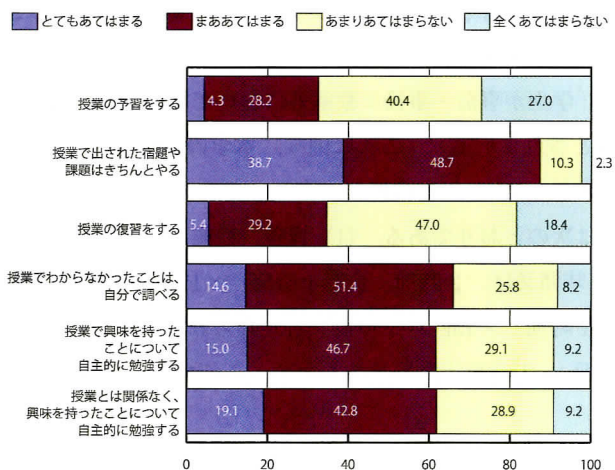


図1 授業に対する取り組みについて

(Benesse教育研究開発センター『大学生の学習・生活実態調査』より)

次に、「大学生活で力を入れていること」では、一番力を入れているのは「趣味」であり、「とても力を入れた」「まあ力を入れた」「少し力を入れた」を合わせて約9割の学生が力を入れていると回答している。その次が「大学の授業」であり、「とても力を入れた」「まあ力を入れた」

「少し力を入れた」を合わせて8割は超えている。

これらの質問からは、学生は大学の授業に力を入れ、出された課題はきちんと行い、自分の興味関心によって自主的に勉強したいという気持ちがあるが、予習復習に対する意識は薄いということがわかる（図2参照）。

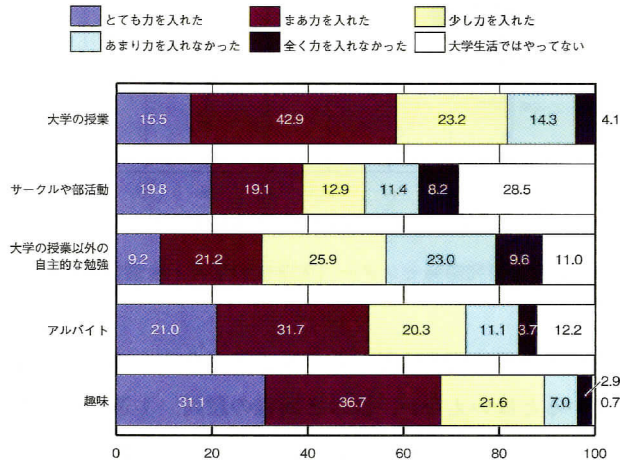


図2 大学生活で力を入れていること

（Benesse教育研究開発センター『大学生の学習・生活実態調査』より）

しかし、学習したい気持ちがあるにもかかわらず、実際に勉強しているかというところではない。1週間の過ごし方に関する設問のうち、「授業の予復習や課題をやる時間」によると、0時間から1時間未満を合わせて48.7%となる（図3参照）。

これは、回答学生のうち、約半数は1週間に1時間にも満たない時間、つまり1日10分未満、または全く勉強しないことを示している。単位認定の基準で考えると、1日に1科目ずつ5日間授業を履修した場合、1週間で5科目の授業を履修することになる。その場合、1科目につき4時間の予習復習を含む自主学習を行わなければならないので、1週間に20時間は予習復習を含む自主学習を行わなければならない。1週間に1科目以上は必ず履修しているはずなので、最低4時間以上は自主学習が必要であるが、3時間以上勉強している学生は、合わせて26.6%である。このように、単位を認定されるだけの自主学習をしている学生は、3割にも満たないほどである。

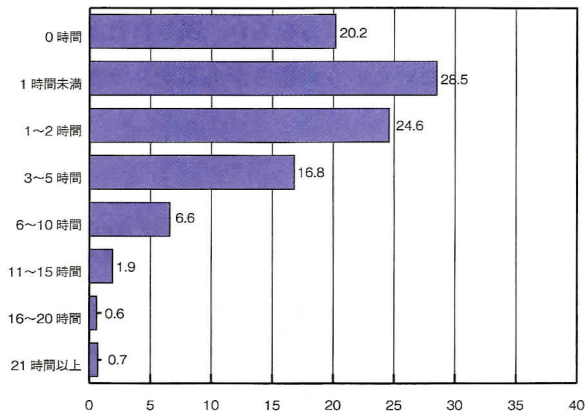


図 3 授業の予復習や課題をやる時間

(Benesse教育研究開発センター『大学生の学習・生活実態調査』より)

また、学生は自主学習や興味関心に対する学習意欲があるものの、実際、自主的に大学の授業以外に学習をしているとはいえない。図 3 と同様の設問、1 週間の過ごし方に関する設問のうち、「大学以外の自主的な勉強をやる時間」によると、0 時間から 1 時間未満を合わせると 61.4% となり、6 割の学生は自主的な勉強をおこなっていないのである (図 4 参照)。

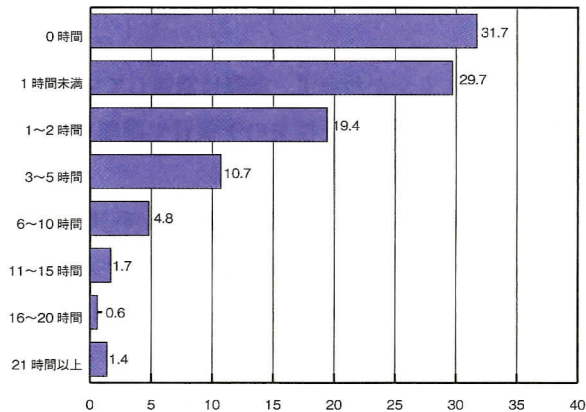


図 4 大学以外の自主的な勉強をやる時間

(Benesse教育研究開発センター『大学生の学習・生活実態調査』より)

学生は、学習に対する意欲はあるものの、どのように学習してよいのかわからず、自主的に学習できていないと考えられる。また、高校時代までに自ら勉強する習慣がない場合、さらに

自主学習に取り組むことは難しくなる。このような学生に自主学習をおこなわせるためには、授業の進め方や内容、さらに自主学習を促すための仕掛け作りが欠かせないものとなる。言い換えれば、その仕掛けさえあれば、学生は自主学習の方法を身につけ、自ら学習の意欲を高めていくことができるようになるのである。

つまり、大学における授業では、単位認定に必要なだけの自主学習を行う材料を学生に提供できておらず、教員の単位認定に対する認識不足や自主学習に対する指導不足は明らかである。学生が自ら学習することができる授業作りが必要なのである。

Ⅲ プレゼンテーション授業における自主学習の必要性

1 PBLを活用した自主学習の促進

PBL (Problem-Based Learning) とは、与えられたテーマや課題に取り組む中で問題を見つけ出し、その問題を手がかりに学習を進めていく少人数グループ学習とされている。日本語では「問題基盤型学習」や「問題に基づく学習」と訳されている。この学習方法を通じて、学習者は各学問分野で学習した事柄を体系的に理解し、実践現場における知識活用の方法を学ぶことができる。

PBLにおいて、学習者は与えられたテーマや課題について、問題は何であるかを見つけ出し、その問題を手がかりに解決方法について学習を進めていく。このような学習は講義ではなく、主にグループによる自主学習を主体として行われる。自主学習の成果は、発表などを通して示され、それに対する他グループや教員からのフィードバックを得る機会を設ける。その後、フィードバックの中で得られた新たな問題や、新たなテーマ・課題をもとに再び問題発見・問題解決のプロセスを踏む。

自らが設定した問題を発端に自主学習を中心に進める方法は、知識習得の上で受身の講義型の授業よりも効率が良いとされ、PBLを用いた授業は講義形式の授業に比べ、学生の満足度も高いという結果も得られている⁷⁾。これは、自主学習という「学習への意欲」が必要な能動的学習形態を用いるためである。自らの興味関心によって得られた問題に対して、自身の力でさまざまな方向から解決を探ることが、より深い知識修得を促進し授業満足度につながっていると考えられる。

このような学習成果を得るためには、教員はどのような働きをするべきであろうか。まず、教員は学生自身が関心をもち、「もっと知りたい」という学習意欲をかき立てる課題設定を行

わなければならない。ここで与えるべき課題とは、学習内容を細かく指示するものではなく、めざすべき目標といった幅を持たせた課題設定が適切である。学生が興味・関心のある問題設定を行うことで、学習意欲の向上が期待できるからである。課題設定に魅力がなければ、学生の学習に対する意欲は生じず、PBLにおいて中心となる自主学習を行うことを期待することができない。

次に、適切なフィードバックを行うことである。学習結果に対するフィードバックも満足度につながる要因の一つであると考えられる。フィードバックによって学生は自主学習の「成果」を得ることができる。自身の学習方法が誤っていなかったか、どのような学習を行えば良いのかといった学習方法へのイメージ作りを行うことができる。また、一人では考えることのできなかった視点からの指摘や新たな問題の創出など、次の学習に対する動機付けを行うことができる。さらに、他者や他グループに対するフィードバックを行う機会を与えることによって、批判的な思考を修得することができ、自らの学習方法に対するモニタリングを行うことも可能となる。適切なフィードバックによって、学生が自分の成長を感じ、自信をつけることが可能である。

これらの前提として、学生が遠慮なく発言でき、他者の意見を受け入れることができる人間関係や雰囲気作りが重要である。PBLの学習方法は、学習の進行を教員一人が行うのではなく、学生が自分自身で学習を進行する。そのために教員は学生の学習意欲向上や環境整備など、サポートを行うことが大きな役割となる。教員の準備する課題や指導次第では、グループ学習だけではなく、個人の自主学習促進におけるPBL活用も可能ではないだろうか。次項以降、本学の取り組みの中でその可能性を考察する。

2 本学のプレゼンテーション科目におけるPBL活用

本学におけるプレゼンテーション関連科目は、1年次後期「プレゼンテーション概論」、2年次前期「プレゼンテーション演習Ⅰ」、2年次後期「プレゼンテーション演習Ⅱ」、3年次前期「情報総合プレゼンテーション演習」であり、プレゼンテーション実務士資格⁴⁾を取得するための中心科目である。これらの科目では、個人・グループの活動を行ううえで、PBLを活用している。

まず、「プレゼンテーション概論」においてプレゼンテーションとはどういうものなのかということを学ぶ。この授業の中では、グループワークとして自分たちがプレゼンテーション時にチェックすべき項目を挙げるといった評価表作成をおこなう。また、1回から2回程度、自己紹介という内容で1分間スピーチを行い、実際に人前で発表する場を設ける。当然のことながら、自主学習をしてから発表に臨む姿勢というものをそれまでの授業において浸透させる。

60名前後が「プレゼンテーション概論」を受講し、その大半が2年次以降、主な専攻分野が分かれる前の1年生の履修である。この授業を受けた後、「プレゼンテーション演習Ⅰ」に進むが、半分以下の10名から20名弱の授業となる場合が多い。「プレゼンテーション概論」を履修せずに「プレゼンテーション演習Ⅰ」を履修する学生の中には存在するが、「プレゼンテーション概論」を履修してから「プレゼンテーション演習Ⅰ」を履修する学生は、プレゼンテーションを通して授業にやりがい求め、自己の成長を望むやう気のある学生が多い傾向にある。

「プレゼンテーション演習Ⅰ」では、主に「スピーチクリニック」というテーマを掲げながら進める。個人発表を重視し、自主学習への取り組みを継続するように促す。その際、うまくやりたいという気持ちを持たせ、自主学習を継続できるような仕掛けとして、担当教員による発表直後の的確なフィードバックと、授業後に利用できる発表時のVTRを用意する。そのために、発表時にはVTRを撮影し、個人個人のVTRを学内でいつでも見ることができるよう保存してある。学内ネットワークのアクセス権を持った者に限り、学内で閲覧することが可能であるため、学生が学校での自主学習を行う材料となる。このVTRを使用しながら自己の発表の反省と他人のよいところを評価し、まねをするという行為によって自主学習を進める。また、先輩のVTRを参考にし、見本となるロールモデルを見つけるように促すことで、明確な目標を持たせることができる。

また、アサーティブネス⁹⁾の学習を通して、お互いを尊重し合えるクラスの雰囲気作りもおこなう。お互いを尊重しながら良かった点と改善点を善意で指摘しあえる環境づくりをしなければ、個々のプレゼンテーション能力の向上はありえない。お互いに協力、協働する意識が生まれることで、クラス全員のレベルを向上していくことができる。

授業内では、ペアワークや3名程度のグループワークとして、発表の良かった点と改善点を話し合ったり、グループ内で発表し合いながら、お互いがフィードバックをしたりという作業を行うことで、クラスの雰囲気を学生自身が作っている。また、授業外で学生同士が集まってお互いに発表を見せながら練習することも自主的におこなうようになる。

「プレゼンテーション演習Ⅱ」では、個人発表と並行しながらグループワークとして映像作品を制作する。「プレゼンテーション演習Ⅰ」を履修した学生のほとんどが、この科目を履修している。中には、時間割の都合上、履修が難しい学生がいることもあるが、次年度以降に履修する学生もいる。この科目では、個人の能力を高めながら並行してグループ活動としての課題を与えており、授業時間外での個人学習に加え、グループ活動を課している。学生はPBL活動を行い、自主的に学習する意欲、協力する姿勢を養う。グループ活動では、お互いの意見を衝突させながら個人の成長とともに、履修学生全体のプレゼンテーションに対する意識を高めていく。

「情報総合プレゼンテーション演習」では、チームを組み、代表一人のプレゼンターを人前で発表できるようチームで育てる、といったことを行う。また、それと同時に個人での発表、映像制作もおこなう。これまでの総まとめとしての講義であり、ほとんどの場面でPBLによる学習を行う。1年半の講義でクラスの雰囲気作り、個人の能力アップをしていかなければ、最後の科目である「情報総合プレゼンテーション演習」という講義は成り立たない。

また、この授業の履修者の中から、全国大会の予選である中四国学生プレゼンテーション大会¹⁰の出場者が決まる。チームの発表者もプレゼンテーション大会の発表者もクラス全員で応援し、協力する体勢を整えるのである。

このように、本学のプレゼンテーション授業では、学生自身が問題を発見し、それを解決していくためにどうすべきかを自主学習を通して学ぶことができる。プレゼンテーション授業におけるPBLの活用は、個人、グループに関わらず、自主学習を促す一つの方策であると考えられる。

3 PBL活用の効果

本学においてPBL活用の効果は、どの程度あったのであろうか。自主学習に対する意識とフィードバックについて、学生はどのように感じているのかという点から考察することを目的に、アンケートを実施した。対象者は2009年度の情報総合プレゼンテーション終了時までの履修者103名（卒業生57名、在学生46名）のうち、連絡を取ることできた82名（卒業生36名、在学生46名）である。回答者数は37名（卒業生16名、在学生21名）で回答回収率は45%であった。アンケートの実施時期は、2010年2月から3月の間である。アンケートの送付・回収について、卒業生はメール（29名）と郵送（7名）によって行い、在学生は最終授業後にメールで配布し、回答を求めた。

PBL学習におけるアンケート対象者の課題は、プレゼンテーション能力の向上である。そのため、プレゼンテーションの準備・練習・VTRの視聴や映像作成のためのグループワークなどが自主学習にあたる。フィードバックは自己評価、学生同士、教員によって得られると考えられる。以上を踏まえてアンケートの作成を行った。以下、アンケートの結果からプレゼンテーションの上達、学生の自主学習に対する意識、フィードバックの効果について述べる。

3-1 プレゼンテーションの上達について

プレゼンテーションの上達についての設問では、57%と半数以上の学生が「実際の発表」がプレゼンテーション上達に必要な方法であると回答している（図5参照）。その理由として最も多かったのは、「慣れ」であった。「実際の発表」は学生にとってなかなか得ることのできな

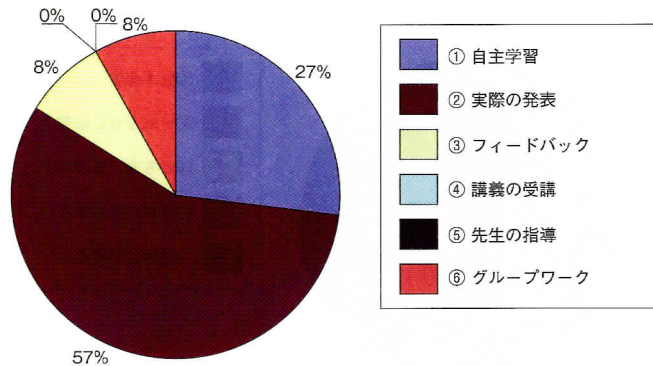


図 5 プレゼンテーション上達において必要なこと

い聴衆を前にしたプレゼンテーション実践の場を提供しているといえる。

ただし、一見すると「実際の発表」が「フィードバック」に大きな差をつけて学生に重要であると認識されているように見えるが、発表がプレゼンテーションの上達に必要なことだと回答した理由に「実際の発表で失敗して悔しい思いをして改善点を見つけて、反省していく」や「実際に行うことによってその過程で学ぶことがたくさんある」といったことが挙げられている。このことから、実際の発表の効果には、自己評価などフィードバックの効果が含まれている可能性が考えられる。次回アンケート作成の際にはこのことを考慮し、「実際の発表」と「フィードバック」の違いを明らかにした上で質問を行う必要がある。

また、図5において27%が必要であると回答した「自主学習」について、学生は「自主学習によって成長することができる」や「自信を持って発表することができる」という理由を挙げている。また、「たくさん練習をして、プレゼンテーションを自分のものにして、余裕を持って発表できる」という回答も得られた。このことから「自主学習が最も必要である」と感じている学生は、自主学習によって成長したと感ずることによって、自信を持って発表することができると思われている。このような心理プロセスが学習意欲をさらに向上させているのではないだろうか。以下、自主学習とフィードバックの効果について詳細に検討する。

3-2 学生の自主学習に対する意識

学生の自主学習に対する意識に関する設問では、自主学習を必要だと感じている学生は100%であった。そのうち、86%は必ず必要であると考えており、プレゼンテーション授業における自主学習への動機付けは十分に行われていると考えられる（図6参照）。

また、自主学習の実施に関する設問では、自主学習をおこなったと回答した学生が92%（十

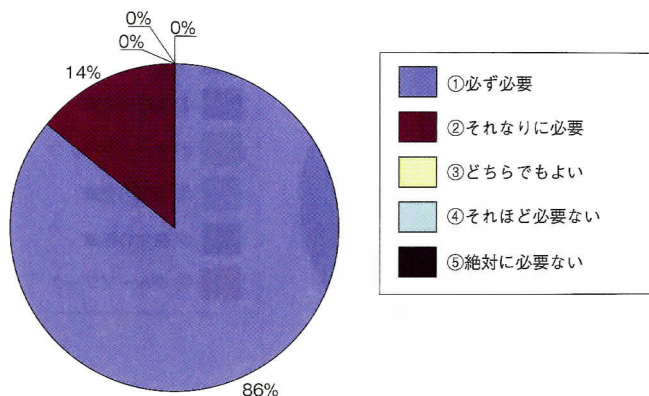


図 6 学生の自主学習に対する認識

分におこなった, それなりにおこなった, 数回おこなった)であった(図7参照)。自分であまり行わなかったと考えている学生であっても, ある程度の回数, 時間の練習をこなしている。また, ①から③までの「おこなった」と考えている学生と「あまりおこなっていない」と考えている学生の練習時間にそれほど大きな差はなかった(表1参照)。

練習時間に差がないにもかかわらず, 「あまりおこなわなかった」を選択した学生がいた理由として, この授業を履修している学生にとって, 自主学習は「しなければならないこと」という意識があることが挙げられる。そのため, たとえ自主学習をしていたとしても, 納得いく練習はできていないと学生本人が考えた場合, 「あまりおこなわなかった」を選択することになるのである。

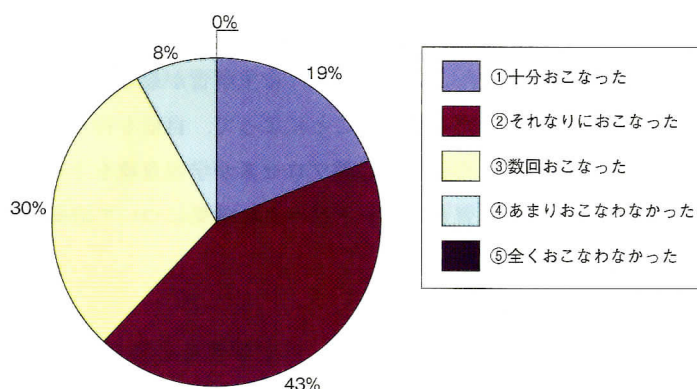


図 7 学生の自主学習の実施認識

表 1 各回答における平均自主学習時間とリハーサル回数

	十分 おこなった	それなりに おこなった	数回 おこなった	あまりおこなわ なかった	全くおこなわ なかった
平均時間	2.41	3.01	1.39	2.17	—
平均回数	6.00	14.92	4.30	2.00	—

自主学習について、学生がどの様に感じているのかを知るために自由記述欄を設けた。自由記述欄の記述から、自主学習への動機付けについて、大きく分けて2種類の回答が得られた。まず、自分自身への効果を求める動機付けである。自主学習を行うことで「自信をつけることができる」「失敗をしないため」といった発表への不安を軽減することや、「より良いものを作るならば自主学習は必要である」「自主学習なしに成長は望めない」といった目標に向かい、さらに成長したい、という願望が自主学習の動機付けになっている。2点目は、聴衆への効果を期待する動機付けである。「聞き手のことを考えれば当然のことである」「相手を思いやった内容を何日も前から準備することが必要」との回答があり、これは聴衆に対し、より良いプレゼンテーションを行いたいという点で自分への効果を求める動機付けとは異なるといえる。

自主学習の効果について、学生は「自分に自信が付き、堂々と発表することができる」「気持ちに余裕が生まれる」と感じている。逆に自主学習が十分でないと感じている場合は、「発表を無事に終えることにとらわれてしまい、余裕がない」「緊張して不安を抱えながらの発表になる」といった、失敗に対する不安や「逃げ出したくなる」といった余裕のなさ、そして十分な自主学習を行わなかった後悔を感じている。自主学習を十分に行うことで学生はプレゼンテーションを行う際の不安や心配を軽減し、自信を得ることができると感じている。

本学のプレゼンテーション授業において、自主学習は必要なことであるとの認識が得られ、実際に十分な時間の自主学習が行われていることが明らかになった。また、自主学習によって得られた成果が次の自主学習への動機付けにつながっていることが確認された。よって、本学ではPBLの自主学習促進への取組は成功しているといえる。

3-3 フィードバックの効果について

学生がだれからのフィードバックを重視しているのかに関する設問において、48%は教員からのフィードバックを重視していることが明らかになった。次に重視されるのは、友人からのフィードバックとその他の22%である。その他とは、自己評価・友人・教員「何れのフィードバックも重要である」、「それぞれの相乗効果が最も有効なフィードバックの方法である」との意見である。自己評価が最も重要であると考えているのは8%であった(図8参照)。

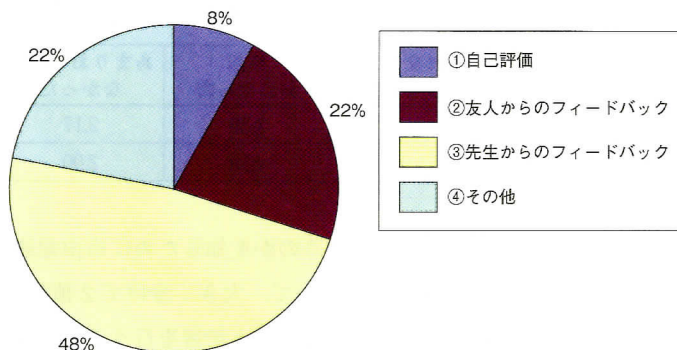


図 8 重視するフィードバックについて

教員からのフィードバックを重視する学生が半数近いことから、教員が学生に与えるフィードバックの影響が大きいことが予想される。このことから教員は、適切なタイミングで適切なフィードバックを行うことが求められているといえる。また、自己評価への重要度が低く感じられる要因は、「自分では気づかない部分を指摘してもらえる」「いろんな視点から自身を改善するのが一番良い」「視野が広がる」といった、自分とは異なる視点からの指摘をフィードバックに求めているからである。このような他者の視点からのフィードバックによって、自分が抱える新たな問題の発見を行うことができ、それを成長のきっかけとして捉えることができているということである。以上のことから、本学の取り組みにおいてフィードバックを効果的に行うことができる環境が整っているといえるであろう。以下では、それぞれのフィードバック効果の特徴を考察する。

自分自身によるフィードバックの必要性について、学生はどのように考えているのだろうか。「絶対に必要」「どちらかという必要」と感じている学生が97%を占め、ほぼ100%である(図9参照)。全体から見た重要度は低かったが、自分自身によるフィードバックの必要性は多く

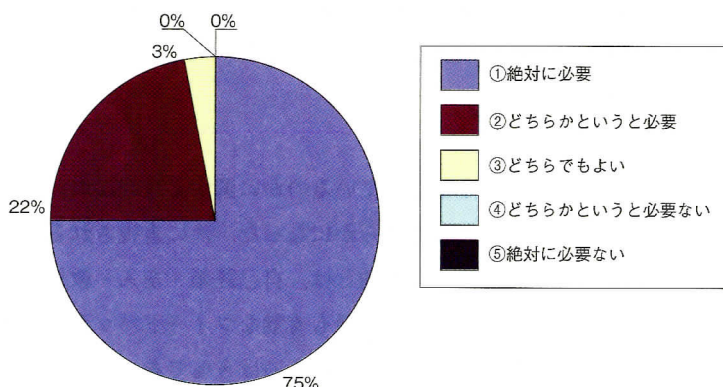


図 9 自分自身によるフィードバックの必要性

の学生が感じているといえよう。

本学では、自分自身によるフィードバックを行う仕組みとしてプレゼンテーションのVTRを利用しているのは先述したとおりである。この仕組みの中で自分自身によるフィードバックが必要であると感じる主な理由として、「自己反省を行うことで同じ失敗を繰り返さない」「できなかったことの把握ができる」「プレゼンテーションを行っている時には気づくことができない問題点に気づくことができる」などが挙げられる。これらは、自分自身のフィードバック、つまり自己反省を通して新たな問題発見を行っているといえるであろう。今回のアンケートでは、新たな問題発見のプロセスが働いていることが確認できた。本学におけるVTRを使った自分自身によるフィードバックは有効に働いているといえる。

友人からのフィードバック、教員からのフィードバックの必要性についての回答は何れも「絶対に必要」「どちらかという必要」の合計が100%であった（図10、図11参照）。「自分では気

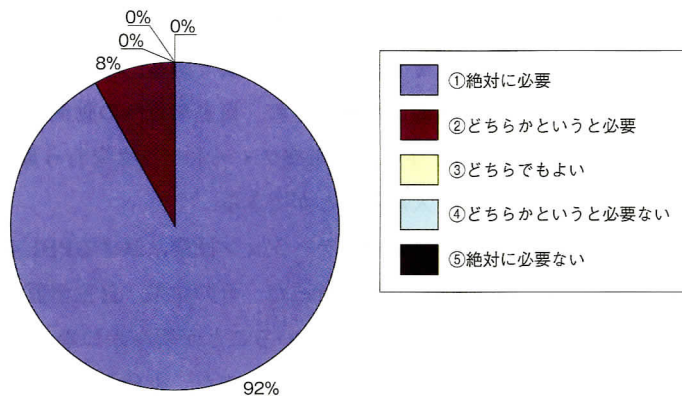


図 10 友人からのフィードバックの必要性

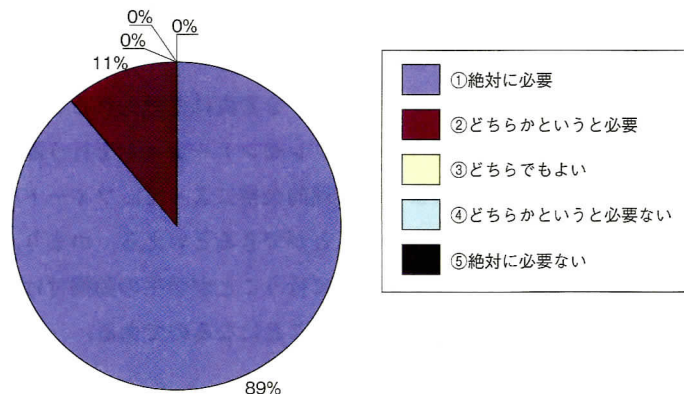


図 11 先生からのフィードバック

づかない改善点を知ることができる」といった客観的な意見が得られるという点では共通している。

友人からと教員からのフィードバックにおいて異なる点は、友人からのフィードバックは同じ目標を持ち、共に頑張る仲間からの指摘であるため、共に向上していこうという「自分自身によるフィードバック」や「教員からのフィードバック」からでは得難い動機付けを行うことができる。また自分自身もフィードバックを行う側になるため、相手が何を伝えたいと考えているのか、どのような表現方法が適切なのかを考えながら他者のプレゼンテーションを傾聴するようになる。よき聴衆としての姿勢を養成することができるといえよう。さらに、相手にフィードバックを与える際、どのような表現が適切か、相手に受け入れてもらうことができる表現はどのようなものか、といったコミュニケーション能力を育成する場になると考えられる。

教員からのフィードバックは「的確なアドバイスをもらえる」「改善方法を知ることができる」「一言でも反省点がもらえるとうれしい」といった意見が多く、学生にとっての信頼度が高い。また、「緊張感をもってプレゼンテーションに臨むことができる」という意見もある。ここでは的確で解りやすいフィードバックを与えることが必要である。教員が問題点を的確に、明確に示すことで、学生がめざすべき目標が明確化され、自主学習への動機付けを行うことができる。教員が学生にほどよい緊張感を与え、適切なフィードバックを行う環境づくりによって、学生は素直にフィードバックを受け入れることができる。

今回、アンケートを通して本学のプレゼンテーション授業におけるPBL活用について、自主学習とフィードバックの働きについて考察を行った。その結果、自主学習もフィードバックもPBLにおける動機付けの重要な機能を果たしていることが明らかになった。適切なフィードバックによって自主学習が促進されていたのである。また、十分な自主学習がフィードバックの効果を高めているという結果も得られた。自主学習を十分に行い、自信と精神的余裕を持ってプレゼンテーションに臨む学生は、後のフィードバックを素直に受け入れることができるとの回答が多く見られた。逆に自主学習が十分でないと感じている場合は、自主学習が不十分であったことを理由に、他者からのフィードバックを素直に受け入れることができないという回答が得られた。自主学習を十分に行うことでプレゼンテーションを行う際に不安や心配を軽減し、自信を得ることができる。このような心理的余裕によって、フィードバックをスキルアップへの動機付けとしてより有効に活用することができるといえる。つまり、練習や事前準備を行う自主学習、適切なフィードバックを十分に行うことが学生の動機付けにつながり、結果的に学生のプレゼンテーション能力の向上を促すことになるのである。

4 今後の授業に向けて

現在の授業における問題を解決するためには、教員が自主学習の内容を吟味したうえで、学生が自主学習を通して自分で問題を発見し、それを解決していく仕掛けを考える必要がある。このような仕掛けを通して、学生の問題発見・問題解決能力の育成をめざすのである。学生に大学での単位取得に必要な自主学習をどれだけさせることができたかによって、学生の授業に対する満足度にも差が出てくる。学生が自分にとっての効果的な自主学習を行うことで、学生は成長できたという達成感を得ることができ、それが授業に対する満足度につながってくるからである。

これらの授業に対する問題を解決する方法の一つとしてPBLを取り入れることが考えられる。この学習方法を取り入れることによって、学生自身が中心となって学習し、学生に問題発見・問題解決能力を身につける機会を与えることが可能である。

本学におけるこれまでのプレゼンテーション授業の取り組みでは、自分の発表VTRを見ることで、自分自身の発表に対して改善すべき点を発見し、その改善点を練習によって少しずつ克服していくといった問題発見・問題解決の流れは完成していると考えられる。発表VTR、教師による的確なフィードバックなど、学生自身が自ら成長に向けた自主学習をするための意識作りと仕掛けを準備することで、学生が自主学習をしたいと思える環境を整えることは可能である。教師がそれらの準備を行うことによって、学生が自ら自主学習に励み、単位認定に必要なだけの自主学習を行うことができるようになるのである。

また、グループ活動を行わせることによって、学生同士が自然とグループ内での問題を発見し、解決していくことも学習することができる。当然、授業中のみならず、自主的にグループで集まって授業時間外に学習するという効果も期待できる。この活動によって、個人の成長のみならず、人間関係の構築やコミュニケーションの方法も自然と学習することができるのである。重要なことは、教師が何もかも準備し、指示を出すのではなく、ある程度の指示を出したあとは学生に任せ、アドバイスはするものの、できる限りグループ内での問題発見、解決をめざすことである。

プレゼンテーションの授業を行う場合に重要な点は、まずプレゼンテーションの導入の授業によって、自分を成長させたいという動機付けを行うことである。次に、個人の発表に取り組ませることで、自分自身で良かった点と改善すべき点を発見させ、それを学生自身が練習によって克服していくことである。さらに、グループ活動と個人発表の2つを同じ時期に行い、コミュニケーション能力と個人の技術の向上をめざすことも必要であろう。最後に仕上げとして、一つの問題に対してクラス全体で取り組む活動と個人発表の総まとめを行うことで、学生は2年間の授業を通して自分の成長と自信を確認するのである。

プレゼンテーション授業にPBLを取り入れた、これらの取り組みを通じて、経済産業省が2006年から提唱している「社会人基礎力¹¹⁾」を向上させることも可能であると考えられる。「社会人基礎力」には、3つの能力と12の能力要素が存在するが、現在取り組んでいるプレゼンテーションの授業においては、バランスよくこれらの能力を身につけることができる。個人発表では、「考え抜く力（シンキング）」、グループ活動では、「チームで働く力（チームワーク）」、全体を通して「前に踏み出す力（アクション）」を養うことができる。

今後さらに、これらの活動を発展させるために、PBL活動をより理解しなければならない。そして、学生が自分の力で取り組む力をつけて、それを発揮するためにも、必要な仕掛けやカリキュラムを提供できる環境を整えなければならない。現在、プレゼンテーション授業において学生の力を発揮する場としては、学内では高校教員対象学校説明会¹²⁾などでプレゼンテーションを行うさまざまな機会を与えている。また、学外での活動としては、中四国学生プレゼンテーション大会に参加することもおこなっている。

今後の授業展開において、経済産業省が行っている「社会人基礎力育成グランプリ¹³⁾」への参加も学生の実践、活動の場の一つとして考えられる。この大会は、経済産業省が「社会人基礎力」の育成、普及の一環として2007年度から行われており、全国の大学の「社会人基礎力」育成事例と成果を学生チームが発表する大会である。この大会に参加することで、学生の目標を設定し、モチベーションを高める材料の一つとなる。また、外部の評価を受けることによって自分たちの成長を感じ、客観的に自分を見つめることもできる。この大会に取り組むための仕掛けやカリキュラムを考えることで、今後の授業の更なる展開に活用できるであろう。プレゼンテーション以外の授業やカリキュラムにおいてどのように取り入れるかは、今後の課題である。

IV おわりに

プレゼンテーションの授業には、自主学習が必要であるということは、学生のアンケートによって明らかである。学生が自主学習をおこなう体制を整えるための仕掛けとして、フィードバックの仕組みや、自分を振り返ることのできる動画の準備など、仕掛けを整えることが重要である。勉強しない学生に、いかに学びたいと思わせ、授業の満足度を高めるかということは、今後の大学の講義における課題の一つであるといえる。

また、教員自身の授業に対する熱意一つで、学生の授業に対する取り組み方は変わってくるのである。予習復習は当然のことであるが、自主的に学習をおこなえない学生が多い現在、予

習復習をさせる仕掛けを準備することがいかに重要であるかを考えなければならない。ただ椅子に座って90分間過ごさせるだけの授業では、学生の学習意欲、満足度、学習効果は上がらない。単位が認められる学習時間を保証するために、学生が意欲的に学習に対して取り組むことができる仕掛けづくりが必要である。

しかしながら、教員は学生が授業に対して意欲的になるよう授業を展開し、それを指導することは当然のことである。すなわち、通常通り授業を展開していれば、学生の満足度は高いといえる。適切な教材と指導がなされていないことによって、学生の学習意欲は低下し、授業満足度も上がらないという結果に陥るのである。

今後の授業に向けては、新たな取り組みが必要である。学生に学びたいという授業を展開するために、適切な教材と指導について考え直し、学生にPBLを用いた活動に参加させ、学習能力を高めていく仕掛けが必要である。PBLを活用した授業の取り組みは、今後の課題であるといえる。プレゼンテーション授業だけではなく、すべての授業において最も重要なことは、授業における心身ともに学生の姿勢を正す教員の指導と、学生の自主学習なのである。

【注】

- 1) ここでのPBLとは「Problem-Based Learning」の略であり、問題に基づく学習のことであり、主に医学、工学などの分野で取り入れられてきた学習方法である。PBLと呼ばれる学習には、他にも「Project-Based Learning」というプロジェクトに基づく学習もある。これは、具体的な学習課題を立ててプロジェクトを進めていく学習方法である。どちらも学習者自身为中心となり、反省、反復作業を実践していくという共通点がある。
- 2) 文部科学省「21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―」（1998年10月26日）の第2章では、「大学評議会現在の我が国の大学制度は単位制度を基本としており、1単位は、i)教員が教室等で行う時間及び ii)学生が事前・事後に教室外において準備学習・復習を行う時間の合計で標準45時間の学修を要する教育内容をもって構成される。これを基盤とし、授業時間は1学年間におよそ年30週、1学年間で約30単位を習得することが標準とされ、したがって大学の卒業要件は4年間にわたって124単位を習得することを基本として制度設計されている。」とされている。
- 3) 『広島女学院大学大学要覧2010年度』の169ページに記述がある。
- 4) 文部科学省「21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―」（1998年10月26日）の第1章では、「学部段階の教育については、一般に教員は研究重視の意識は強いが教育活動に対する責任意識が十分でない。授業では教員から学生への一方通行型の講義がおこなわれている。授業時間外の学習指導を行っていない。学期末の試験のみで成績評価が行われている。成績評価が甘く安易な進級・卒業認定が行われている。教養教育が軽視されているのではないかとの危惧がある。専門分野の教育が狭い領域に限定されてしまう傾向があるなど、教育内容と教育方法の両面にわたり多くの問題点が厳しく指摘されている。また、学生によっては、授業に出席しない、授業中に質問をしない、授業時間外の学習が不十分である、議論ができないなど、学習態度とその成果の両面について問題点が指摘されている。」とされている。
- 5) 文部科学省「大学における教育内容・方法の改善について」（http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm（2010年9月28日取得））のQ3において、「（前略）各大学において1単位あたりの必要な授業時間を確保するとともに、学生には大学の教室で授業を受けるだけでなく、教室外においても自主的な学習をおこなうことが求められます。このため、授業中に指導をおこなうだけでなく、シラバス等により、年間スケジュールや毎回の講義内容を詳細に明示したり、講義の前提として読んでおくべき文献を指示するなど、学生の準備学習・復習について適切な指示を与えることも大学の教員の務めとすることができます。このことについて、大学やそれぞれの教員が自覚を持って、授業の設計と学習指導に取り組むことが必要であり、また、これに応じて、学生の側においても主体的に学習に取り組んでいくことが重要です。」とされている。

- 6) Benesse教育研究開発センター『大学生の学習・生活実態調査』
(http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/index.html (2010年9月28日取得)) は、インターネット調査で行われており、調査対象は18～24歳の大学1～4年生(ただし留学生、社会人経験者を除く)、有効回答数は4,070名(うち男子 2,439名、女子 1,631名)、調査時期は2008年10月上旬、調査項目は、高校での学習実態、大学選択で重視した点、大学への志望度、大学の満足度、大学生生活で力を入れてきた活動、1週間の過ごし方、授業への出席率、大学での学習状況などとなっている。
- 7) 吉田一郎・大西弘高編著『実践PBLテュートリアルガイド』(南山堂2004年8月)による。
- 8) プレゼンテーション実務士とは、全国大学実務教育協会の認定資格の一つである。資格取得には、協会から認定された本学の科目のうち、必修科目(5科目10単位)、選択科目(10単位以上)の履修を必要とする。また、必修科目はすべて7以上の評価を得なければならない。
- 9) アサーティブネスとは、誠実、率直、対等、自己責任を4つの柱とした、相手も自分も尊重するコミュニケーションの方法である。
- 10) 日本ビジネス実務学会中国・四国ブロック研究会主催の大会である。
- 11) 経済産業省が2006年から提唱する「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされている。また「企業や若者を取り巻く環境変化により、「基礎学力」「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要」とされている。
(<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm> (2010年9月28日取得))
- 12) 毎年5月下旬から6月初旬に本学で行われる、高校教員を対象とした本大学の説明会である。教職員が説明する以外に、各学科の学生が、学生生活とともに、自分の学科を紹介するプレゼンテーションを行う。
- 13) 「社会人基礎力育成グランプリ2011募集要項」の記述による。
(<http://www.meti.go.jp/press/20100809002/20100809002-2.pdf> (2010年11月1日取得))

【参考文献】

1. 石井三恵「ビジネス・コミュニケーションとしての「プレゼンテーション」—シラバス作成過程における位置づけに関する考察—」『広島女学院大学生活科学部紀要』第12号 2005年3月
2. 石井三恵「プレゼンテーション教育におけるフィードバック効果」『広島女学院大学生活科学部紀要』第15号 2008年3月
3. 吉田一郎・大西弘高編著『実践PBLテュートリアルガイド』南山堂 2004年8月

【参考ホームページ】

1. 文部科学省 大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—(答申)」(1998年10月26日大学審議会)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/981002.htm (2010年9月28日取得)
2. 文部科学省 大学の教育内容・方法の改善に関するQ&A「Q3 日本の大学の現状について、「授業に出席しなくても単位が取れる」「勉強しなくても簡単に卒業できる」などの声を耳にしますが、これについて大学はどのような対策を講じているのでしょうか。」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm (2010年9月28日取得)
3. 文部科学省 大学審議会「大学審議会 大学教育部会 (1998年10月8日第105回議事要旨)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/gijiroku/004/981002.htm (2010年9月28日取得)
4. 総務省 e-Gov「イー・ガブ」『大学設置基準』(1956年10月22日文部省令第二十八号)
<http://law.e-gov.jp/htmldata/S31/S31F03501000028.html> (2010年9月28日取得)
5. 経済産業省『「社会人基礎力」育成のススメ～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して～』
<http://www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-susume.pdf> (2010年9月28日取得)
6. 経済産業省「社会人基礎力育成グランプリ2011」
<http://www.meti.go.jp/press/20100809002/20100809002-2.pdf> (2010年11月1日取得)
7. Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査」
http://benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/index.html (2010年9月28日取得)